



南島譚

幸福

中島敦



青空文庫





昔、此の島に一人の極めて哀れな男がいた。年齢を数えるという不自然な習慣が此の辺には無いので、幾歳ということはハッキリ言えないが、余り若くないことだけは確かであつた。髪の毛が余り縮れてもおらず、鼻の頭がすつきり潰れてもおらぬので、此の男の醜貌は衆人の顰笑の的となつていた。おまけに脛が薄く、顔色にも見事な黒檀の様な艶が無いことは、此の男の醜さを一層甚だしいものにしていた。此の男は、恐らく、島一番の貧乏人であつたらう。ウドウドと称する勾玉の様なものパラオ地方の貨幣であり、宝であるが、勿論、此の男はウドウドなど一つも持つてはいない。ウドウドも持つていない位だから、之によつて始めて購うことの出来る妻をもてる訳がない。たつた独りで、島の第一長老の家の物置小舎の片隅に住み、最も卑しい召使として仕えている。家中のあらゆる卑しい勤めが、此の男一人の上に負わされる。怠け者の揃つた此の島の中で、此の男一人は怠ける暇が無い。朝はマンゴの繁みに囀る朝鳥よりも早く起きて漁に出掛ける。手槍で大蛸を突き損つて胸や腹に吸い付かれ、身体中腫れ上ることもある。巨魚タマ

カイに追われて生命からがら独木舟に逃げ上ることもある。鹽ほどもある車渠具に足を挟まれ損つたこともある。午になり、島中の誰彼が木蔭や家の中の竹床の上でうつらうつら午睡をとる時も、此の男ばかりは、家内の清掃に、小舎の建築に、椰子蜜採りに、椰子繩綱いに、屋根葺きに、家具類の製作に、目が廻る程忙しい。此の男の皮膚はスコールの後の野鼠の様に絶えず汗でびつしより濡れている。昔から女の仕事と極められている芋田の手入の外は、何から何迄此の男が一人で働く。陽が西の海に入つて、麵麩の大樹の梢に大蝙蝠が飛び廻る頃になつて、漸く此の男は、犬猫にあてがわれるようなクカオ芋の尻尾と魚のあらとにありつく。それから、疲れ果てた身体を固い竹の床の上に横たえて眠る——パラオ語でいえばモ・バズ、即ち石になるのである。

彼の主人たる此の島の第一長老はパラオ地方——北は此の島から南は遠くペリリュウ島に至る——を通じて指折の物持ちである。此の島の芋田の半分、椰子林の三分の二は此の男のものに属する。彼の家の台所には、極上鱈甲製の皿が天井迄高く積上げられている。彼は毎日海

亀の脂や石焼の仔豚や人魚の胎児や蝙蝠の仔の蒸焼などの美食に饜あいているので、彼の腹は脂ぎつて孕はらみ豚の如くにふくらんでいる。彼の家には、昔その祖先の一人がカヤンガル島を討つた時敵の大將を唯の一突きに仕留めたという誉れの投槍が蔵されている。彼の所有する珠貨ウツロツは、玳瑁たゐまいが浜辺で一度に産みつける卵の数ほど多い。その中で一番貴いバカル珠に至つては、環礁リフの外に跳梁する鋸鯨のこざりあめでさえ、一目見て驚怖退散する程の威力を備えている。今、島の中央に巍然ぎげんとして屹立きりつする・蝙蝠模様で飾られた・反り屋根の大集会場イを造つたのも、島民一同の自慢の種子である蛇頭の真赤な大戦舟を作つたのも、凡すべて此の大支配者ムシエデルの権勢と金力とである。彼の妻は表向きは一人だが、近親相姦禁忌の許す範圍に於いて、實際は其その数は無限といつてよい。

此の大権力者の下僕たる・哀れな醜い独り者は、身分が卑しいので、直接の主人たる此の第一長老ルツクは固もとより、第二第三第四ルバックの前を通る時でも、立つて歩くこととは許されなかつた。必ず匍匐はふくつこう膝行して過ぎなければな

らないのである。もし、独木舟カヌーに乗つて海に出ている時に長老の舟が近付こうものなら、賤いやしき男は独木舟の上から水中に跳び込まねばならぬ。舟の上から挨拶する如き無礼は絶対に許されない。或る時そうした場合にぶつかり、彼が謹つつしんで水中に飛び込もうとすると、一匹の鱗うろこの姿が目に入った。彼が躊躇ちゅうちよするのを見た長老ルツクの従者が、怒つて棒切を投げつけ、彼の左の目を傷けた。已やむを得ず、彼は鱗の泳いでいる水の中に跳び込んだ。其の鱗うろこがもう三尺大きい奴だつたら、彼は、足の指を三本喰切られただけでは済まなかつたに違いない。

此の島から遙か南方に離れた文化の中心地コロール島には、既に、皮膚の白い人間共が伝えたという悪い病が侵入して来ていた。その病には二つある。一つは、神聖な天与の秘事を妨げる怪しからぬ病であつて、コロールでは男が之これにかかる時は男の病と呼ばれ、女がなる場合は女の病といわれる。もう一つの方は、極めて微妙な・微候の容易に認め難い病氣であつて、軽い咳せきが出、顔色が蒼ざめ、身体が疲れ、瘦せ衰えて何時いつの間にか死ぬのである。血を啗はくこともあれば、啗はかないこともある。此の

話の主人公たる哀れな男は、どうやら、此の後の方の病
 気にかかつていたらしい。絶えず空咳をし、疲れる。ア
 ミアカ樹の芽をすり潰して其の汁を飲んで、蝟樹の根
 を煎じて飲んで、一向に効き目が無い。彼の主人は之
 に気が付き、哀れな下男が哀れな病氣になったことを大
 変ふさわしいと考えた。それで、此の下男の仕事は益々
 ふえた。

哀れな下男は、しかし、大変賢い人間だったので、己
 が運命を格別辛いとは思わなかった。己の主人が如何に
 苛刻であつても、尚、自分に、視ることや聴くことや呼
 吸すること迄禁じないから有難いと思つていた。自分に
 課せられる仕事が如何に多くとも、なお婦人の神聖な天
 職たる芋田耕作だけは除外されていることを有難く思お
 うと考えた。鱻のいる海に跳び込んで足の指三本を失つ
 たことは不幸のようだが、それでも脚全体を喰切られな
 かつたことを感謝しよう。空咳の出る疲れ病に罹つたこ
 とも、疲れ病と同時に男の病に迄罹る人間もあることを
 思えば、少くとも一つの病だけは免れたことになる。自分
 の頭髮が乾いた海藻の様に縮れていないことは明らかに

容貌上の致命的欠陥には違いないが、荒れ果てた赭土丘
 の様に全然頭髮の無い人間だつて俺は知つてゐる。自分
 の鼻が踏みつけられたバナナ畑の蛙のように潰れていな
 いことも甚だ恥ずかしいことは確かだが、しかし、全然
 鼻のなくなつた腐れ病の男も隣の島には二人もいるのだ。

だが、足るを知ること斯くの如き男でも、やはり、病
 が酷いよりも軽い方がいいし、真昼の太陽の直射の下で
 こき使われるよりも木蔭で午睡をした方が快い。哀れな
 賢い男も、時には、神々に祈ることがあつた。病の苦し
 みか労働の苦しみか、どちらかを今少し減じ給え。もし
 此の願が余りに慾張り過ぎていないなら、何卒、と。

タロ芋を供えて彼が祈つたのは、椰子蟹カタツツと蚯蚓
 ウラズの祠である。此の二神は共に有力な悪神として聞
 こえてゐる。パラオの神々の間では、善神は供物を供え
 られることが殆ど無い。御機嫌をとらずとも祟をしない
 ことが分かつてゐるから。之に反して、悪神は常に鄭重
 に祭られ多くの食物を供えられる。海嘯や暴風や流行病
 は皆悪神の怒から生ずるからである。さて、力ある悪神・
 椰子蟹と蚯蚓とが哀れな男の祈願を聞入れたのかどうか、

とにかくそれから暫くして、或晩この男は妙な夢を見た。其の夢の中で、哀れな下僕は何時の間にか長老になっていた。彼の坐っているのは母屋の中央、家長のいるべき正座である。人々は皆唯々として彼の言葉に従う。彼の機嫌を損ねはせぬかと惴々焉として懼れるものの如くである。彼には妻がある。彼の食事の支度に忙しい婢女も大勢いる。彼の前に出された食卓の上には、豚の丸焼や真赤に茹だつたマングローブ蟹や正覚坊の卵が山と積まれている。彼は事の意外に驚いた。夢の中ながら、夢ではないかと疑つた。何か不安で仕方が無い。

翌朝、目が醒めると、彼はやはり屋根が破れ柱の歪んだ何時もの物置小舎の隅に寝ていた。珍しく、朝鳥の鳴く音にも気付かず寝過ごしたので、家人の一人に酷く叩かれた。

次の夜、夢の中で彼は又長老になった。今度は彼も前夜程驚かない。下僕に命令する言葉も前夜よりは大幅横柄になつて来た。食卓には今度も美味佳肴が堆く載っている。妻は筋骨の逞しい申し分の無い美人だし、章魚の木の葉で編んだ新しい呉蓆の敷き心地もヒヤヒヤと冷た

くて誠に宜しい。しかし、朝になると、依然として汚ない小舎の中で目を醒ました。一日中烈しい労働に追い使われ、食物としてはクカオ芋の尻尾と魚のあら、としか与えられないことも今迄通りである。

次の晩も、次の次の晩も、それから毎晩続いて、哀れな下僕は夢の中で長老になった。彼の長老ぶりは次第に板について来た。御馳走を見ても、もう初めの頃のように浅間しくガツガツするようなことは無い。妻との間に争いをしたことも度重なつた。妻以外の女に手出しが出来ることを知つてからも久しくなる。島民等を随使して、舟庫を作らせたり祭祀をとり行つたりもした。司祭に導かれて神前に進む彼の神々しさに、島民共は齊しく古英雄の再来ではないかと驚嘆した。彼に仕える下僕の一人に、昼間の彼の主人たる第一長老と覺しき男がいる。此の男の彼を怖れる様といつたら、可笑しい位である。それが面白さに、彼は、第一長老に似た此の下僕に一番酷い労働をいいつける。漁もさせれば、椰子蜜採りもさせる。我が乗る舟の途に当るからとて、此の下僕を独木舟から鱗の泳ぐ水中に跳び込ませたこともある。哀れな下

僕の慌てまどい畏れる様が、彼にいたく満足を与える。

昼間の劇しい労働も苛酷な待遇も最早彼に嘆声を洩らさせることはない。賢い諦めの言葉を自らに言つて聞かせる必要もなくなつた。夜の楽しさを思えば、昼間の辛勞の如き、ものの数ではなかつたからである。一日の辛い仕事に疲れ果てても、彼は世にも嬉しげな微笑を浮べつつ、栄耀栄華の夢を見るために、柱の折れかかつた汚ない寢床へと急ぐのであつた。そういえば、夢の中で摂る美食の所為であろうか、彼は近頃めつきり肥つてきた。顔色もすつかり良くなり、空咳も何時かしなくなつた。見るからに生き生きと若返つたのである。

丁度哀れな醜い独身者の下僕が斯うした夢を見始めた頃から、一方、彼の主人たる富める大長老も亦奇態な夢を見るようになった。夢の中で、貴き第一長老は惨めな貧しい下僕になるのである。漁から椰子蜜採りから椰子縄作りから麵麩の実取りや独木舟造りに至る迄、ありとあらゆる労働が彼に課せられる。こう仕事が多くては、無数に手の生えている蜈蚣でも遣り切れまいと思われる

程だ。其等の用をいいつける主人というのが、昼間は己の最も卑しい下僕である筈の男である。之が又ひどく意地悪で、次から次へと無理をいう。大蝟には吸い付かれ、車渠貝には足を挟まれ、鱗には足指を切られる。食事はといえば、芋の尻尾と魚のあらばかり。毎朝、彼が母屋の中央の贅沢な呉座の上で醒を覚ます時は、身体は終夜の労働にぐつたりと疲れ、節々がズキズキと痛むのである。每晚斯ういう夢を見ている中に、第一長老の身体から次第に脂気がうせ、出張った腹が段々しぼんで来た。實際芋の尻尾と魚のあらばかりでは、誰だつて痩せる外はない。月が三回盈欠する中に長老はみじめに衰えて、いやな空咳までするようになった。

竟に、長老が腹を立てて下僕を呼びつけた。夢の中で己を虐げる憎むべき男を思いきり罰してやろうと決心したのである。

所が、目の前に現れた下僕は、嘗ての痩せ衰えた・空咳をする・おどおどと畏れ惑う・哀れな小心者ではなかつた。何時の間にかデップリと肥り、顔色も生き生きとして元氣一杯に見える。それに、其の態度が如何にも自信

に充ちていて、言葉こそ丁寧ながら、どう見ても此方の
 願使に甘んずるものとは到底思われない。悠揚たる其の
 微笑を見ただけで、長老は相手の優勢感にすっかり圧倒
 されて了つた。夢の中の虐待者に対する恐怖感迄が甦つ
 て来て彼を脅した。夢の世界と昼間の世界と、何れがよ
 り、現実なのかという疑が、チラと彼の頭を掠めた。痩せ
 衰えた自分の如き者が今更咳をしながら此の堂々たる男
 を叱り付けるなどとは、思いも寄らぬ。

長老は、自分でも予期しなかつた程の慇懃な言葉で、下
 男に向い、彼が健康を回復した次第を尋ねた。下男は詳
 しく夢のことを語つた。如何に彼が夜毎美食に饜ぎ足る
 か。如何に婢僕にかしずかれて快い安逸を娛しむか。如
 何に数多の女共によつて天国の楽しみを味わうか。

下僕の話聞き終つて、長老は大いに驚いた。下男の
 夢と己の夢との斯くも驚くべき一致は何に基づくのか。
 夢の世界の榮養が醒めたる世界の肉体に及ぼす影響は、
 又斯くの如く甚だしいのか。夢の世界が昼の世界と同じ
 く(或いはそれ以上に)現実であることは、最早疑う余
 地が無い。彼は、恥を忍んで、下男に己が毎夜の夢のこ

とを告げた。如何に自分が夜毎劇しい労働を強いられる
 か。如何に芋の尻尾と魚のあらとだけで我慢せねばなら
 ぬか。

下男はそれを聞いても一向に驚かぬ。さもあろうと云つ
 た顔付で、疾く知つていた事を聞くように、満足げな
 微笑を湛えながら鷹揚に頷く。其の顔は、誠に、干潟の
 泥の中に満腹して眠る海鰻の如く、至上の幸福に輝いて
 いる。この男は、夢が昼の世界よりも一層現実であるこ
 とを既に確信しているのである。アアと心からの溜息
 を吐きながら、哀れな富める主人は貧しく賢い下僕の顔
 を嫉ましげに眺めた。

× × ×

右は、今は世に無きオルワンガル島の昔話である。オ
 ルワンガル島は、今から八十年ばかり前の或日、突然、住
 民諸共海底に陥没して了つた。爾来、この様な仕合わせ
 な夢を見る男はパラオ中にいないということである。

底本：「中島敦全集 2」ちくま文庫、筑摩書房
1993（平成 5）年 3 月 24 日第 1 刷発行

入力：ちょも

校正：田中久絵

1999 年 8 月 6 日公開

2004 年 2 月 4 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。